

の軍馬は主を失って、野外に食を求めたおれる等、実に悲惨な情景でした。

引揚げとその後の労苦

酷寒と貧困、耐乏の越年生活も終りを告げ、陽春の訪れが異郷の地に、待望の引揚情報をもたらした。

昭和二十一年五月十五日、万感胸に迫る感激裡に、錦西県コロ島埠頭を出航した引揚船は、一路九州佐世保軍港に入港、無事上陸致しました。

出発駅は、帰国者にふさわしい駅名、南風ヶ崎駅でした。故郷鹿沼駅（栃木県）を目ざして、車中の人となり車窓を流れる風景はまさに、国破れて山河あります。また悲惨な空爆の被害を受けた都市を過ぎて、鹿沼の地を踏んだのは、故郷を出て七年の歳月が流れておりました。

安住の地である実家には、両親と北支戦線復員の第二人と、東京疎開の妹二人の在所帯、毎日が食糧難で農家への闇の買い出し。

引揚地支給の三千円と、二歳の長男、衣類のリユック一個の着のみ着のまま金もなく、職もなし、まったく前

途真暗、遂に妻と相談の結果、七転八起、再生のため妻の出身地、北海道増毛町を旨指して、再度長途の旅に出発しました。

時友人の家を借り、町役場に相談に行き、幸い引揚者住宅を与えられ、冬は、暑寒岳の冬山造材現場人夫、春は、鯉漁場人夫、夏は、町有林植林人夫、秋には出稼炭鉱夫と転々。

漸く、知人の援助により、郵便配達員となり停年まで務め退職。更に警備員として、北洋銀行、増毛高校と、七十八歳春まで務め、現在四人の子供も独立し、興亡果てなし人生航路の余生を、大切に平和であるよう願って、平和祈念事業の責任の一端を記す。

### 惨たんたる八年間の強制労働

山形県 斎藤善作

満州事変の勃発した昭和八年は戦時下の不況の、どん底にあった。

農家の次男であった私は、これを好機とみて現役志願をした。昭和八年十一月、広島の子品港を出港して、二十九日に大連港に上陸。関東軍第一独立守備隊に入り、満鉄奉天線の新民地区の警備の任務についた。

昭和十二年九月に満鉄に入社して安東検車区に配属になった。現地で妻帯して昭和十七年六月に奉天の鉄道教習所を卒業して、満鉄社員として将来性のある充実した日々であった。しかし、昭和二十年八月九日、突如としてソ連軍が満州へ侵攻してきて満州全土が右往左往の大混乱の渦中に巻き込まれた。八月十五日に敗戦により解体した満鉄からは、当座の生活資金として月給の三ヶ月分が支給されて放りだされた。勿論、毎月積み立てていた身元保証金や社内積立金などは、そのままかえらな

い。  
結局、敗戦後、旧満鉄のすべてを接収した中共軍とソ連は、日本人の技術系の現場の中堅職員を強制残留させたのである。昭和二十一年十月には一級技術生として安東検車区に私は配置されて中国人現業員の技術指導にまわされた。給与も最低で、主食は高粱、粟、唐もろこし、

等の雑穀だけで、しかも配給だったが価値のない軍票は敬遠されたし、物価は、やみくもに上がるので、家族四人の家計は次第に窮乏に追い込まれた。また何一つ抵抗できない強制残留の身であるから管理する中共軍の指示のままに、あっちこっちと移動させられて、そのつど、持っていた家財道具を失ってしまい、衣類等も物々交換になってしまって、荀生活の悲惨な毎日であった。

帰国についての情報がまったく閉ざされておった不安な毎日でもあった。昭和二十二年八月には中長鉄路の牡丹江検車区、三年後には、さらに修繕区へと勤務も振り回された。牡丹江の冬季間は零下二十五度の極寒の日があり屋外での検車、修繕の仕事のとき、手袋とスパナ等の道具がいてついでにしまっほどの寒い中での苦痛に耐えられない仕事も強いられた。

屋根の破損した宿舍とは名ばかりの廃屋に、家族はふるえながらの冬の夜だった。階段の下に、豚と鶏を飼って栄養源にしたが、その飼料と私たち家族の主食が同じという惨めさでした。

最後の西安検車区の勤めは気候も温暖で、野菜類も多

くなり生活は楽になった。しかし飲料水は買い求めなければならぬ水不足の生活だった。昭和二十八年三月二十日、突然の帰国指示により上海港を出港、二十四日東舞鶴に上陸して歓喜の帰国をした。しかしそれも束の間だった。とにかく就職しなければと国鉄に履歴書持参の日参をしたが受け入れられなかった。私の実家に身を寄せて、東京での配管工をしながらの惨めな暮しをした。昭和二十九年に県営住宅に入居することができて、さらに町内の製麺工場に勤めるようになり、ようやく生活基盤も安定した。長女も良縁に恵まれ、長男も県職員になり、現在、私は厚生年金の受給の恩恵もあって、苦勞した妻と共に幸福な余生をおくれるようになった。

自分で選んだ道とはいっても、満州での戦後の強制残留で、三十歳台であった私の八年間の空白のために人知れぬ苦勞を積んだことになる。

## 女学生の中の私の恐怖の体験

福島県 藤井 貞

私達が渡満する三年前に父が第一の職場として渡満した。日本と満州の政府合同会社の「満州拓殖公社」である。父のいる北満北安省北安に行く嬉しさはあったが、船はいつでも爆撃されるかという不安があった。なんとかぶじに北安に着いたが、三年ぐらいで裸になり、乞食同然の姿で帰国するなど思いもよらなかった。しかも、日本の歴史上かつてなかった敗戦、それに外国での敗戦の悲惨さを私達子供も体験させられたのだ。当時の記憶は半世紀も前のことだが、しっかりと昨日のようによみがえってくるのである。

ソ連の満州侵攻後、日本人がどれほどくやしき思いをしたことか。若い娘達は連れ去られ、「助けて」という声にも、どうすることもできなかった。「無条件降伏」という情けなさであった。銃をバンバンと発砲し、中国人と